学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０２０年４月５日
文責：ＪＵＮ

コロナ感染禍のなかの対話的学びは？

１．コロナ対策への不安感

令和元年度の学校は、コロナ感染対策による一斉休校というだれもが予想し得なかった状況のうちに終了してしまいました。そして新年度は例年通りに学校再開ということだったのですが、首都圏の感染者が一気に増加したことから、懸念される状況の地域については休校を継続せざるを得ないことになりました。いったいいつになったら……、全国の学校の教師たちはそのような思いで固唾をのんでコロナの推移を見つめています。そして、子どもたちが学校に戻ってくる日のために備えています。

学校を再開させたらどうしていくべきか、そのことで教師たちは苦慮しています。だれもが体験したことのない事態なので、指針は示されているとはいえ、こうしたら万全ということが定かではなく、この先どうなるのかという見通しも立たず、しかも、相手は目に見えない病原体なのです。そういう状態で、大勢の子どもたちを預かり、命を守らなくてはならない、それはかなりプレッシャーのかかることです。

まず何よりも、手洗い、うがいを基本中の基本として励行させる、密閉空間にしないために教室の窓を開けて換気するといったことを最優先にするよう意思統一されていることでしょう。また、大勢の子どもを密集させてしまうことになる集会などはしばらく実施しないことになるでしょう。その関連で、学校行事の見直しもしているにちがいありません。

しかし教師にとって最も気がかりなのは、教室における過ごさせ方です。学校生活においてもっとも長い時間を過ごすのが教室であり、そこで行う授業は子どもたちを集めた形で実施しないわけにはいきません。換気は怠りなくするとしても、間近で会話をする、いわゆる「密接」に当たることのリスクをどうやって避けるか、これは大変難しいことです。授業時間だけではなく休憩時間のこともあります。

それより心配なのは給食時間です。マスクを外して食事するのですから、飛沫感染のリスクは授業中より高いと言えます。いつもなら楽しい時間ですが、ただ黙ってもくもくと下を向いて食べさせることになるのでしょうか。子どもに言って聞かせてそのようにしたとしてもリスクは依然として消えているわけではありません。なんともつらいことです。

授業時間、休憩時間、清掃時間、給食時間、それぞれの状況に合わせて大勢の子どもたちの安全のために手立てを講じ見守る、それが教師の仕事です。終息の目途が立たないこともあり、不安感いっぱいの船出になりそうです。

２．対話的学びをどうするか

このたよりを読んでくださっている方々の多くは、「学び合う学び」に取り組んでいる先生方か

「学び合う学び」に関心の深い方たちでしょう。その方々が、今、とても知りたいと思っていらっしゃるのは、このようなコロナ感染禍において、「学び合う学び」「対話的学び」はどうしていけばよいのかということではないでしょうか。それは、もっと具体的に言えば、対話と学び合いによる学びはどうしていけばよいのか、グループの学びをどう考えればよいのかということです。

どういう対策がとられるかは地域によって多少の異なりはあるものと思います。ですから、このようにしたほうがよいと一括して述べることはできないし、対策の異なる地域別に述べることもできません。ですからここでは、比較的厳しい状況の学校について述べようと思います。

たぶん、それらの学校においては、「密接」にならないように、机を一律に前向きに並べ、一つひとつの机の距離をできるだけ離すようにしているのでしょう。さらに、飛沫感染を防ぐために対面して話し合うペアやグループは当面実施しないということになるだろうと思われます。昨年度末、学校再開に踏み切ったいくつかの市の状況がそういうものだったことからそのように推測されます。私がここで述べたいのは、こういう状態になった地域の授業についてです。

①　解禁されるときのために、「学び合う学び」の理念に基づく指導を

「学び合う学び」の理念の一つは、すべての子どもの学びの保障です。そのため、グループが必要だったのですが、そのグループができないとなると、いちばん懸念されるのが子どもの「わからなさ」や「つまずき」が見えなくなり、すべての子どもの学びの保障が不十分になることです。机がすべて教師の方に向けられ、一人ひとりの机が離れていると、どうしても一人で考える、一人で取り組むというようにしてしまいます。そうすると、教師は、そのようにして頑張っている子どもが、一人ででもできるように、わかるようにしようと考え、いつの間にか、教師が説明し教え込む一斉授業型指導になってしまうのです。

けれども、どれだけ教師が努力しても、大勢の子ども一人ひとりの状況はとらえきれません。こうして、子どもの「わからなさ」や「つまずき」は、教師にも仲間たちにも気づかれることなく埋没してしまうことになります。これが、一斉指導型授業のいちばんの問題点なのです。

グループで学び合っていれば、わからないことは尋ねることができるし、互いのしていることや仕草が見えるので、だれがどこがわからなくて困っているか、ある程度、子ども同士で気づけています。しかし、コロナ感染禍で、グループができず子ども同士のかかわりが薄くなると、子ども同士で気づくことができません。こうして一斉指導型のよくない影響をもろに受けることになるとしたら、それは子どもにとってつらいことになってしまいます。

そうならないために、教師は、悪しき一斉指導型授業にならないようにしなければなりません。それには、すべての子どもの学びを保障する「学び合う学び」の理念に基づく「一人ひとりの学びを大切にする」指導を心がけることです。それは、どうすればできるのでしょうか。

②　一人ひとりの学びの事実をとらえる

子どもの学びは、いろいろな考えの「擦り合わせ」で深くなります。しかし、それを行うグループにはできません。グループにしないで、みんな前向きの机の並びで、子どもの考えの「擦り合わせ」をするには、どうすればよいでしょうか。その方法はたった一つです。教師が子どもの考えを見つけ出し、教師がその考えを全員に示し、教師のコーディネートで擦り合わせるのです。

すでに拙著に書いた事例ですが、「45−18」という繰り下がりのある引き算の学習をしていた時でした。私が教室に入ると、１人の子どもが黒板に筆算で計算をしていました。それは次ページのよ

うなものでした。

４５
－１８
３３

見ていただいてわかるように、繰り下がりを学んでいる途中なのでこの子どもの計算は間違っています。しかし、この間違いは繰り下がりを理解するうえでとても重要なポイントを有しています。それを見抜いた教師がこの子どもを指名し、この間違いから学びを引き出そうとしたのです。この後、子どもたちは、５から８が引けないという事実に一人ひとりが立ち向かい、とうとう十の位のブロック１本を手に持って「これ、両替して（１のブロックに替えて)」と言い出したのです。それは、十の位に４本ある十のブロックの１本を 10 個に分解して一の位に戻せば、一の位には 15 個の一のブロックがあることになり、それなら８を引くことができるという「繰り下がりの原理」を、子どもたちが発見した瞬間でした。

これは教師の仲立ちによる「学び合う学び」です。子どもが学びに魅力を感じるとき、学ぶ喜びを感じるとき、それは、先生に教えてもらうのではなく自分たちで発見したときです。その発見を褒められでもしたらうれしくてならなくなるでしょう。

この事例のように、教師が子どもの「つまずき」とか「間違い」とかをとらえれば、かなりすべての子どもの学びの保障に近づきます。では、どのようにすれば、この事例のように、学びを深めるための子どもの事実がとらえられるのでしょうか。それには、右下の表のように、教師が見つけ出す場合と、子どもから教師に告げる場合の二つがあるのではないでしょうか。

教師が見つけ出す場合は、とにかく一人ひとりのことを丁寧に観察し、用紙を手に持ちメモをとり、子どもの考えていることを探ることです。類推することです。

一方子どもには、わからない、困った、これでいいのだろうかなどと不安になったら挙手をして告げていいのだと普段から言っておかなければなりません。もちろん、子どもは、自分の言ったことを大切に受け止めてもらえないと出してきません。子どもにとって「わからないこと」を教師に告げるということはハードルの高いことなのです。教師はそのハードルを下げてやらないといけません。

とにかく、右の表に記したようなことを丁寧に、誠実に、温かく実行することです。そうすれば、子どもの事実はある程度とらえられます。

【どうやってとらえるか】

●教師が見て回る場合	・目を凝らす ・メモをとる ・子どもの考えを探る ・子どもの考えを類推する
●子どもが告げる場合	・挙手して告げる ・書いて告げる ・Tablet で告げる ・振り返りを書いて告げる

③　必要なのは教師の「仲立ち」「仲介」

「学び合う学び」の理念は「すべての子どもの学びを保障する」ことだと述べました。「学び合う学び」に取り組む先生たちの間で、そのことを表す合言葉のようなものがあります。それは、「１人の子どもも１人にしない」というものです。

１人の子どもも１人にしないということは、簡単なことではありません。それを完璧に行うことは難しいかもしれません。しかし、教師は、いつもそうありたいという思いを胸に抱き、子どもに向き合っていきたいものです。それには、だれのどのような考えも、間違いも、わからなさも、すべて大切に尊重しようと心がけることです。

もちろん、子どもたちにもその認識がなければなりません。そうでなければ、子どもたちによる「学び合う学び」ができないからだし、その認識こそ人として生きていくうえの大切な価値観にな

り倫理観になると思うからです。けれども、その子どもの認識を育てるのは教師です。教師にその認識があり、その認識にのっとった働きかけがあるから、それを受けて、子どもたちも、自ら仲間に働きかけ、尊重し合う学び方ができるようになるのです。

コロナ対策でグループができなくなった状況において、新しい年度が始まりました。今年に限らずいつでも、年度始めは一年間の「学びのあり方」の方向を決める非常に重要な時期です。その時期に、どういうことを学び、どういう経験をするかで、子どもの意識は大きく変わります。その大切な時期に、このような状況になってしまいました。

ということは、子どもに経験させることが極めて限定されることになるわけです。だとしたら、それを補うのは教師しかいないということになります。ここは逆転発想をするしかありません。子どもに体験させられない今こそ、「学び合う学び」の本質を、教師が子どもに伝えることができると考えるのです。

その一つが、前述した「45-18」における間違いの生かし方です。

教師に「１人の子どもも１人にしない」「すべての子どもの学びを保障すること」、それが「学び合う学び」の理念だという認識があれば、この事例のように、子どもの事実をとらえることができます。とらえることができたら、そこから、学びを進展させることができます。そのとき、子どもたちに「間違いから学びが生まれる」「間違いはみんなの学びが深まる宝物」という認識が生まれるようにすることができます。だとしたら、それは、この苦難の時期を終えて、子どもたちによる「学び合い」が戻ってきたとき、躊躇なく子どもたちによって生かされることになるでしょう。

いま、教師たちがもっとも心がけなければならないのは、いつの日か子どもたちがそうなるような、そういう認識が育つようなはたらきをするということです。それは、一言で言えば、「仲立ち」「仲介」です。

「密接」を避けるため、子どもが積極的にかかわることができません。しかし、子どもの学びは「つながり」で深まります。これまで「学び合う学び」に取り組んできた人なら、だれもがそのことを実感しています。現在の状況にあっても、その「つながり」を子どもにもたらしてやりたい、そう思っておられるでしょう。だから、その「つながり」を教師の「仲立ち」「仲介」によって生み出すのです。つまり、今の時期の子どもの学びの深まりは、教師による「仲立ち」「仲介」次第だということになるのです。

実は、これは、「学び合う学び」がまったくやられていなかった学校で、「学び合う学び」の授業づくりを立ち上げるときにとても大切なことなのです。教師が「仲介」をして、子どもと子どもを「つなぐ」ということをしてやらなければ、最初は子どもにはできないのですから。

「つながる学び」「学び合う学び」を経験してその良さと大切さを知ることができるか、それとも、教師が今の状況では無理だと子どものつながりを諦めてしまい、一人ひとりを孤立させた学びにしてしまうか、そのどちらになるかによって、子どもたちの学び方も、学ぶ意識も変わっていくのではないでしょうか。

④　考えと考えをつなぐ

子どものことをとらえるために一人ひとりのことを見て回ったり、子どもの言葉に耳を傾けたりしているとき、前述した「わからなさ」や「困っていること」とは別に、「異なる考え」を見つけ

出すよう心がけることも大切です。

「手ぶくろを買いに」を読む授業のときでした。１人の子どもが、帽子屋さんが子狐の手が戸の隙間から差し込まれたとき、その手が狐の手であったにもかかわらず「先にお金をください」と言って手袋を売ってやるところで、「どうして先にお金をわたすのかな」と書き込みをしたのです。この子どもは家でよくお手伝いで買い物に行っている子どもでした。自分の経験から、品物も決めないうちに先にお金を要求されることはなかったのでしょう。こういうことを書いた子どもはこの子ども一人でした。こういう異質な考えが読みを深める契機になります。だから、この後、全体学習になったとき、この子どもにその考えを発表させ、そこから、帽子屋の警戒心を読み取ることになったのでした。

この子どもはほとんど発表しない子どもでした。ですから、もし教師がこのことを見つけなかったら、この子のこの気づきは埋もれてしまったのです。グループをしていたら子どもたちが見つけ出すこともできるでしょう。グループができないのなら、それはすべて教師の働きによって見つけ出すしかありません。このことを教師は自覚しなければなりません。

この子どものように、グループでは話すことはできても全体学習になると発言しようとしない子どもはどこの学級にもいます。そういう子どもは、グループになることがなくなると、毎時間、ほとんど何も発信しないで過ぎていくことになります。おまけに、書くことも得意ではない子どもだったら、教師がどれだけ注意深く見るようにしていても、その子どもを生かす場面をつくりだすことができません。だから、教師がアンテナをいっぱいに広げ、常にこういう子どものことを気にかけ、数少ないチャンスを逃がさないよう心がけなければなりません。

それにしても、「書かせる」という手立てはとても有効です。グループで聴き合うことができないとなればより大切になります。書いてあって、教師がそれを読んで気づきさえすれば、学びの表舞台に持ち出すことができるからです。そうすれば、「わからなさ」も浮き上がってきます。埋もれません。ですから、いつもより多く授業の進行中に書かせるようにするといいです。そしてもう一つ、これまでにも実施していたと思いますが、「ふり返り」が大きな意味を持つことになります。

しかし、子どものこういう事実を発見したとしても見つけただけではいけません。子どものことをとらえたら、それを生かさなければなりません。生かし方にはいろいろあります。「45-18」のときのように一人ひとり考えさせることもあるし、「手ぶくろを買いに」のときのように、他の子どもの考えを発表させることもあります。また、「ふり返り」を翌日の授業で持ち出してそこから学びを発展させることもできます。そのどれも、教師が行うことは、とらえた子どもの考えを他の子どもと「つないでいる」ということなのです。実は、この「つなぎ」こそが、グループで子どもたちにさせたいことなのです。それが「擦り合わせ」であり、「対話的学び」だからです。そう考えると、このような経験をしていくことで、コロナの終息によってグループ学習が戻ってきたとき、すっとそのように自分たちでできる子どもになるのです。

このように考えると、グループができない今、教師がどういう授業をするかがとても重要なことだとわかってもらえるでしょう。子どもの事実が見えない教師、もっとよくないのは見ようとしない教師ですが、そして、とらえたことで「つなぎ」ができない教師の学級は、学びが痩せたものになり、学習理解の個人差が大きくなります。できない、わからないことが埋もれてしまうからです。そして、仲間とつなげば学びが深まったり楽しくなったり、発見があったりするという実感が得られなくなるのです。

グループができないということは、子どもの学びがどういうものになるかは、すべて、教師のはたらき次第ということになるのです。もちろんそういうはたらきを教師がするのは簡単なことではありません。すべての子どもに対して、どの子どもも生かしたいというまなざしを持っていないと、一斉指導型と変わらない対応になってしまいます。

それにしても、これまでグループを頻繁に入れた「学び合う学び」を実践してきた先生方は、グループができなくなった今、子どもたち同士で学び合うことがどれほど大切なことだったか、これまで子どもの学び合いに助けられてきたか、そのことを実感することになるのでしょう。そして、そういう学び方が当たり前にできることがどれほどありがたいことか、かみしめることになるのでしょう。

⑤　グループになったときにどういう学び方をするとよいか語っておく

いずれ、グループができる状態は戻ってきます。ここまでに記したように、教師は、そのとき、子どもたちの「学び合う学び」が一気に花開くように、そのための芽を育てることです。今は、地中で種に栄養を送り、芽吹きを促進しているときです。やがて温かくなり、芽は地面の上に顔を出します。そのとき、一気にすくすくと伸びる、そのときのための営みを今、するのです。

しかし、そういうことを教師が思っているだけでは期待したほどの状態にはなりません。子どもに自覚がなければよりよい状態にはならないのです。種から芽を出し伸びていくように、実行するのは子どもたちなのですから。

そこで、心がけておくとよいのは、グループができるようになったらこういうふうにできるとよいということを、ここまでに掲げたような事例が生まれるたびに、子どもたちの心に届くように語っておくことです。例えば、「『どうして先にお金をわたすのかな』というような自分しか考えてなかったことも出せる学級にして、そういう考えに寄り添って聴き合い考え合うようにしよう。そしてグループができるようになったら、そういう聴き合いをグループでやりたいね」とか、「『45-18』の 33 という間違いのような間違いやわからなさって宝物だよね。グループができるようになったら、間違いを宝物にできるグループにしようね」とかいう種まきをしておくのです。そうすれば、子どもたちは、聴き合い・学び合うことの良さと大切さを実感し、グループができるようになったら、一気に、これ以上ないほどのグループの学びをしてくれるでしょう。

最後にもう一度言います。一斉指導型の教え込みの授業にしてしまってはなりません。今こそ「学び合う学び」の理念を忘れず、必ずやってくる「春」の到来に備えましょう。それには、教師が「仲立ち」「仲介」をして、「つながる学び」を子どもたちに感じさせることです。教師のその心構えと実践が子どもたちの希望になります。

さあ、試練の令和２年度の始まりです。希望の灯りを目指して……‼